



卓 話



「長嶋・王に見る指導者のあり方」

スポーツ ジャーナリスト

柏 英樹氏

1. 第2回WBC(ワールド・ベースボール・クラシック)に見る日本野球の実力。

私はご紹介にありましたように、スポーツ、特に野球界とは深い繋がりをもっています。



今一番話題になっているのが、日本中が沸いた第2回WBCでの「サムライ・ジャパン」の優勝です。代表チームは良く頑張ったと思います。長嶋茂雄さんは「日本野球全体の勝利だ」と言っておりました。今回の優勝で何が良かったかと言うと、ピッチャーが良かった。日本のプロ野球は選抜メンバーの松坂大輔(レッドソックス)、岩隈久志(楽天)、ダルビッシュ有(日本ハム)だけでなく、今回のメンバーには選ばれなかったが、セ・リーグの前田健太(広島)、パ・リーグではソフトバンクの和田毅等、いいピッチャーが沢山います。たまたまWBCでの使用球が滑り易いという特長があった為、カーブを武器として投げるピッチャーが代表から外されました。昨年の日本シリーズMVPの岸孝之(西武)は、WBCの使用球だとカーブが思うように決まらないというので外されました。

然しながら、WBC連覇で日本のピッチャーは世界一良いという事が証明されたと思います。ただ今回のWBCでは韓国と5回も戦ったように、変則的なトーナメント方式であり、サッカーの世界カップのように喜べないところがあります。例えばアメリカは、このWBCを公式戦開幕前のオープン戦=調整期間と捉えて、選手毎に投球数制限をもうけています。日本との準決勝戦で先発したオズワルド投手(アストロズ)は、50球までは交替させないで投げさせるという制限があった為、全米のジョンソン監督はオズワルドが序盤に打たれて交替させたかったが、それも出来なくて日本に敗れてしまいました。サムライジャパンでは、2塁手の岩村が所属のレイズから2塁以外では使わない約束で参加していました。最強と言われたドミニカ共和国代表チームがオランダに負けた番狂わせも、アメリカチームが弱かったのもメジャーからの規制があったからだと思います。

それにしても日本は良くまとまっています。昨夏の北京五輪では、日本代表の星野監督が矢面に立たされました監督采配では変わらないものの、原監督の良いところは若

い選手を自由にさせていた。今の若い選手は上から圧力をかけられると反発をするので、星野さんのように怖くて何かあると怒られるということが選手を萎縮させたり、そっぽを向かれたりした。その点、原監督はイチロー選手をはじめとした名選手が沢山いた為、休日にゴルフを許可したりして自由にさせた。負けたらおそらくマスコミから選手管理が甘かったと叩かれたと思いますが、選手が全てに伸び伸びやれたのが一番の勝因だと思います。

2. 日本野球の将来

将来的にも、今春の選抜高校野球優勝の長崎清峰高の今村猛投手とか準優勝の花巻東高の菊池雄星投手、こういういいピッチャーが続出しています。アマチュア野球の成果がプロ野球に繋がり、日本代表に育って行くという事で日本野球の層の厚さが、これからの日本野球の発展に繋がって行くと思います。

3. 長嶋監督采配

さて長嶋監督ですが、最初の監督就任時には西本聖投手を鉄拳制裁する等、厳しく怖い監督であったのですが、2度目に監督になった時には、一切怒ったりしなくなりました。

「今の若い子は上から押さえつけると絶対に反発する。反発して頑張ろうではなく、シュンとなってしまう」。監督が怒らなくてはならない時は、1人だけ部屋に呼んで怒り、人前では決して叱り付けないという方向で徹底していました。その当時に一番怒られたのは元木大輔内野手(現解説者・テレビ)でした。怒る時は、マネージャーを通して元木選手1人を監督室に呼び二人きりになってから叱りつける。翌日、グラウンドで元木選手と顔を合せたら、いつもどおりに接する。今の若者の気質を理解して指導していたと思います。ヤンkeesの松井選手は、今でも何かあると長嶋さんのところに頻りに連絡を入れてきます。松井選手を育てる時は、グラウンドで、監督室で、本当に熱心に指導をしました。長嶋さんの監督最後の年の最終戦の前日、松井は泣き崩れて練習に集中出来ませんでした。「明日も大阪で試合があるぞ」という長嶋監督の言葉で何とか練習を再開したというエピソードがあります。それだけ松井選手は長嶋監督に心酔していました。

松井選手がジャイアンツに在籍した9年間、長嶋監督は松井選手を一度も褒めた事はありません。「まだまだです」、「まだ駄目です」と言って長嶋監督は松井選手を褒めませんでした。逆に他の選手、清原和博選手や高橋由伸選手は長嶋監督に褒められマスコミを賑わしていました。それらの選手は、褒められる事によりいい気分になって試合に臨む事が出来ました。これは、松井選手だけを特別に

指導しているのではないという長嶋監督独特の気遣いだったように今では思えます。現役時代は能天気等と揶揄された長嶋監督ですが、実はものすごくいろいろの事を考えている方で選手個々の個性に合せ指導してきた監督であったと思います。

4. リハビリ中の長嶋さん

長嶋さんが脳梗塞で倒れて5年が経過しました。現在は元気になられました。日曜日を除く毎日午後からリハビリに精力的に通っています。たまにお会いした時に「監督、今日もリハビリですか？」と聞くと、「リハビリじゃないよ。筋力トレーニングだよ」と元気な返事が返ってきます。そして長嶋さんが凄いのは、脳障害のリハビリでよく起きる“落ち込む”という状態に、この5年間で一度もなっていないという事があります。常に明るく前向きにリハビリに取り組んでいるという事実。あれだけ重い障害なのに回復が早く、右手を除けば歩くのも早くなって来ました。長嶋さんは、若いときから夢と目標を持たなければ生きていく価値がないと力説していました。夢と目標があれば、充実した人生が送れると確信していました。不幸にも脳梗塞で倒れた当時も、入院4日目から「俺はアテネの監督をやらなければいけない…」と言ってリハビリを始めました。結局アテネには行けませんでした。今度は「何とかファンの前にもう一度元気な姿を見せなければ…」と新たな目標を持って一生懸命努力をしていました。長嶋さんの事だから、次の次のWBCやオリンピックで監督をやろうと思っているかも知れません。

5. 常にプラス志向

長嶋さんの一番良いところはとにかく「プラス志向」なんです。現役時代は寝る前に「9回の裏ツーアウト、バッター長嶋。打ちました！さよならヒット！」。必ずそういうシーンを頭に描いて寝ていたそうです。そうすると、実際の試合でそういう場面になった時に臆することなくイメージ通りのバッティングが出来る。常にいいイメージを思い描くことが長嶋さんの生き方になっているようです。ポジティブな考えというのは大事で、例えば癌になった人が、「ああ俺は駄目だ」と思ってしまう人と、「よ～し、絶対直すぞ」と思っている人の生存率は、ポジティブに考えている人の方が高いという結果も出ているようです。仕事の場合でも成功例を頭に描いて仕事に臨む人のほうが効率が良いという統計もあるようです。常に良いイメージをもって臨む事が大切です。

特に野球は失敗のスポーツです。10回の打席で3回打てば、3割バッターとして評価され年俵が上がる。7回の失敗が許されます。普通の仕事では7回も失敗すればクビになってしまいますが、野球の場合は失敗が許されます。しかし、その失敗の方ばかりに気を取られてしまいますとマイナス志向になってしまいます。だから、「打てるのだ。大丈夫だ」、「失敗しても次の打席で頑張ろう」というように気持ちを前向きにして行かないと野球はやっていられません。リーグ優勝するチームでも40敗、50敗します。全勝する訳ではありません。負けている時でも、「よし、次だ」とポジティブに考えて気持ちを切り替えてやって行く事が技術の進歩にも繋がると考えています。

6. プラス志向・中畑清選手(現解説者)の場合

長嶋さんが監督時代に育てた選手に駒大出身の中畑清選手がいました。彼はとてもガッツのある選手でしたが、ミスやポカが多く荒っぽい選手で一軍と二軍を行ったり来たりしていました。そんな中畑選手が長嶋監督の目に留まったのはキャンプでのある出来事でした。

キャンプの全ての練習が終わった後で、長嶋監督がCグラウンドのはずれにあるバッティング練習場を覗きました。中畑選手が1人で声を出しながらマシン相手にバッティング練習をしていました。その時に中畑選手は「バッター中畑清、打ちましたホームラン」と何度も言いながら打っていました。練習場は狭く打球がネットにすぐにぶつかってしまうような場所ですが、全部の打球をホームランと絶叫する中畑選手に向って、長嶋監督が「おい中畑。今のはいくらなんでもホームランじゃないぞ」と言いました。その一言で長嶋監督が後ろで見ていたのにやっと気付いた中畑選手は、「監督、今は風が吹いていましたから…」と言いました。あきれた長嶋監督は「そうか風か。おまけだ。ホームランだ」と言ってゲージの中に入り、中畑選手のバッティング指導を始めました。練習後の宿舎への帰路、長嶋監督は「ああいう選手がいいね。常にプラス志向で。ああいう選手は伸びるぞ」と言ってそのシーズンから中畑選手を起用し始めました。

その後中畑選手がレギュラーになった或る日、後楽園球場のベンチ裏の大鏡の前でスポーツ記者を前に素振りをしていました。そこをたまたま通りかかった長嶋監督が「キヨシ、調子はどうだ？」と聞きました。「あつ監督、まあまあです」中畑選手が答えました。長嶋監督は「何、まあまあ、まあまあの選手は使えないな。そういう時はキヨシ、絶好調って言うのだよ。誰を使おうか迷った時に、あいつ絶好調って言うたなと思って起用するんだよ」と監督から聞かされ、中畑選手は「絶好調男」になり、レギュラーに定着して大活躍しました。これもプラス志向が効果をあらわした一例です。

7. プラス志向・1944年10月8日ナゴヤ決戦

さらにプラス志向の最も良い例をお話します。ジャイアンツの歴史の中で「10. 8」という劇的な優勝シーンがありました。

そのシーズンは、首位をキープしていたジャイアンツが終盤に来て中日から猛迫され同率で最終戦を迎えるというハードなシーズンでした。勝ったほうが優勝という状況の下、長嶋監督率いるジャイアンツが敵地名古屋に乗り込みました。決戦前夜の宿舎でのミーティングの時、長嶋監督は中日の先発が絶対視される今中投手のビデオを用意しました。20分程の短いビデオです。このシーズンのジャイアンツは今中投手が打ち崩せずに苦杯をなめていました。その中で、ジャイアンツの選手が今中投手から打ったヒットばかりを集めたビデオです。長嶋監督は何も言わずに選手達にこのビデオを見せました。ヒットを打つ良いシーンばかりですから、選手達の気持ちが高揚して来ます。主力選手であったグラッデン選手のセンター前のポテンヒットシーンが最後に放映され選手全員で大喝采。長嶋監督が「グラッデン、明日はもっと良いヒットを打とうね」と言う選手達が大いに盛り上がり、翌日の健闘を誓い眠りにつきました。当日の試合前の練習中、評論家各氏がジャイ

アンツ不利と論評する中で、長嶋監督は報道陣を呼び、ジャイアンツの選手は落着いていて中日の選手が上ずっている事を両チームの選手に聞こえるように言い続けました。ジャイアンツの選手は自信を持って試合に臨み、松井選手のホームラン等で勝利を収め優勝を決めました。当日のテレビ視聴率は、名古屋地区で54%、関東地区で48.8%、試合前の昼食(中華料理)を一緒に食べた時に長嶋監督の言った「国民的行事」でした。

8. 一生懸命に努力する選手は責めない

野球は失敗するスポーツと先ほど申し上げましたが、王監督もそうですが一生懸命にプレーした選手の失敗は責めませんでした。

この「10. 8」があった1944年のシーズンの初めにジャイアンツは横浜を自由契約にされた「屋敷 要」選手を獲りました。理由は、屋敷選手は守りも良いし足も速い一番バッターに最適だという事でした。屋敷選手は長嶋監督の温情に応えようとキャンプから猛練習をして一軍に定着しました。そのシーズンの横浜戦の最初の試合、当時ジャイアンツは横浜を苦手としていたので、中止になると良いなと思っていたのですが、雨で打球が見難い天候でしたが試合は強行されました。同点で迎えた9回裏、屋敷選手が守り慣れた横浜球場のセンターのポジションに守備固めで起用されました。しかし、どうしたことかセンターフライを目測を誤りエラーをしてしまいました。試合もそれが原因で負けてしまいました。試合後自宅に戻った屋敷選手の自宅に長嶋監督が電話を入れ「今日の事は忘れて、明日からも積極的にやってくれよ」と伝えました。さらなる温情に涙した屋敷選手は、長嶋監督への恩返しの機会も得ず黙々とシーズンを戦っていました。その年、「10. 8」でリーグを征したジャイアンツは、日本シリーズで西武と対戦。その序盤の後楽園球場での試合で、西武鈴木健選手の打ったセンター横の強烈なライナーをスライディングキャッチをし

て勝利に結び付け、長嶋監督から「屋敷のスーパープレーに救われた」と絶賛を浴びました。ヒーローインタビューに立った屋敷選手は「4月のエラーの後、長嶋監督から思い切ってプレーをするように言われました。懸命に突っ込んだらグラブにボールが入っていました」と声を震わせました。選手が一生懸命やった結果の失敗には寛大であった方が良い結果をもたらす。この屋敷選手の例をみても分かるような気がします。

9. 「夢と目標を持ち、プラス志向で実現の努力をする」

長嶋監督も王監督も人間的に素晴らしい人はいません。現役時代の二人の練習は物凄いものでした。バッティングゲージで並んで練習する二人は、どちらかが練習を終えるまで自分も練習を終えない。王さんは、遠征中の宿舎や自宅に帰っても素振りを欠かしませんでした。長嶋さんは練習嫌いと言われておりますが、試合後、自宅の地下室で電気を消して真っ暗な中で、自分で納得の行くスイング音が出るまで素振りをしました。二人の切磋琢磨が今日のプロ野球を築いたと言って過言ではありません。計らずもお二人とも病に倒れるというご不幸がありました。

長嶋さんは懸命のリハビリで驚異的な回復を見せています。「もう一度ファンの前に元気な姿で…」。それに向かって連日の努力を惜しみません。

王さんは胃の全摘出手術を見事に乗り越え野球指導者として復活しました。「夢と目標を持ち、プラス志向で実現の努力をする」。

今でもこのお二人の生き方、何事にも努力を惜しまない姿勢に教わる事の方が多いなと感じます。東京四谷ロータリークラブの皆さんも経営者として、指導者として夢と目標を持ち、日本経済の発展と夢のある社会の実現に貢献されるよう祈っております。本日は短い時間でしたがご静聴を賜りありがとうございました。